

## 特別寄稿

創部18年にして初の  
春・夏連続甲子園出場

横山 通 (昭和40年 土木科卒)

昭和39年度野球部主将・2塁手



昭和39年は東京オリンピックで国中が沸いていた。本校も創立60周年で燃えていた。

当時は、県内の高校野球界は秋田高校と秋田商業の全盛時代で、この2校以外は甲子園への道は考えられなかった。

わが野球部はラグビー部の陰に隠れ、練習場や道具などにも恵まれず問題外と言われても大げさではなかったが、この年は三浦投手を始め、運よくメンバーが揃ったことで2年の秋のリーグ戦から頭角を現し険しい道のりであったが東北大会へと駒を進めることが出来た。

この年の東北大会は秋田で開催された。準決勝は弘前高校、決勝は宿敵秋田商業とであった。春の選抜は東北・北海道地区から2校であり、1県から2校の選考はありえない。この大会を制覇する以外、甲子園の道はない。夢にまで見た甲子園に選手は勿論のこと、秋工OBも目の色を変えた。しかし、宿敵秋田商業に挑む前に弘前高校との試合で大苦戦し余力をなくしてしまった。

延長11回0対0の日没再試合(現秋大野球場)となり、翌日八橋球場で延長15回、やっとサヨナラ・スクイズで逃げきったが、26イニングも投げた大黒柱の三浦投手は疲労困憊、ボールに力もなくなっていた。バックネット裏で偵察していた秋田商業は、翌日の決勝はもらったと思ったに違いない。

決勝戦の前夜、全員で雨天中止を祈った。翌日祈りが通じ、シトシトと雨が降っていた。しかし予定通り決行することになった。スタンドは超満員。3塁側の秋商ファンは「ヤレー、ヤレー！」と、1塁側の秋工ファンは「中止、中止！」と叫び騒然となっていた。雨が降り続きグラウンドの状態が悪くなっていく。とうとう両校長の話し合いとなり、本校の和田校長が「最後の戦いであるがゆえ選手達には、最高のコンディションでやらせてあげようではないか」と説得し順延に決定した。お陰で休養をとることが出来、この恵みの雨と和田校長の一言に救われた。

翌朝は、秋晴れの最高のグラウンド・コンディションであった。三浦投手も最高のピッチングで2対0の完投シャットアウト、創部18年で夢にまで見た甲子園の切符を手にしたのである。勝った瞬間、OBや先生・秋工ファンの大歓声とあの感動は一生忘れられない。

昭和39年2月3日午後2時45分、選抜決定の内報が入った。校長室から「ワーツ」という先生方の歓声を聞いて、やっと安心したものだ。東北・北海道地区からは北海高校と、2校が選抜され補欠校が秋商と発表された。

いよいよ甲子園、第36回春の選抜高校野球大会は、初日の第3試合でジャンボ尾崎率いる四国代表の徳島海南高校との初出場同士の対戦となった。結果は1対4で1回戦の壁を突破できなかったが、相手校は見事この大会で優勝校となった。

甲子園出場により、ボールを補修したり凍て付く土崎での肥料運びのバイト代で支えた部も裕福になりボールなどの道具は新しく買い揃えられたが、グラウンドだけは相変わらずラグビー部の片隅であった。その中で夏の甲子園を目指し、監督・コーチやOBから千本ノックなどの猛練習で鍛えられ、夏の県予選に臨んだ。

楽勝と思われた矢島高校に連打をくらって大苦戦した。矢島出身の三浦にとって幼なじみとの対戦で投げにくかったのである。

当時は山形との西奥羽大会があり、日大山形と山形南と能代高校の4校で競った。日大山形を僅差で破り、決勝戦は能代高校とであった。

7回裏の能代の勝ち越しチャンスのクロスプレーは微妙なタイミングであったが、アウトの判定により本校に勝利の流れがきた。大苦戦だったが3対2で初の夏の甲子園の切符を手にした。

偶然にもこのゲームを妻が、同級生の応援で能代高校側のスタンドにいたそう。いまだに7回裏のあの場面を悔しがっている。

夏の甲子園では、またも初戦で南四国代表校との対戦となった。高知高校は選抜優勝校の徳島海南高校の尾崎に18長短打を浴びせた豪快な黒潮打線を誇る強豪校だ。結果は初の選抜と同じ1対4で敗れ、偶然にも再び対戦校が全国制覇し紫紺の大優勝旗を持ち帰った。春・夏とも優勝校と対戦できたことはある意味幸運としか言いようがないと思う。

私にはこの試合で忘れられない出来事があった。それは四国一のスラッガーと注目されていた4番バッターに、第一打席で三浦投手が、顔面にデットボールを炸裂させたことだ。彼はバッタリと倒れピクリとも動かなく、そのまま病院に運ばれた。彼は自校の優勝をベッドの上でテレビ観戦することになる。

この不運の男が、元ロッテオリオンズ監督の有藤通世であった。彼は母子家庭で母が小さな食堂を営んでいたため、忙しくて息子の試合を観たことがなく、息子にも来るなどと言われていたが、周りの人に勧められ初めて息子の試合を観に行っただ。息子が倒れた瞬間、パニックになりもし通世がダメなら、帰りの船から瀬戸内海に飛び込もうと思いつきながら病院へ駆けつけたそう。このことは彼の「1500本安打達成記念誌」に記載されていた。

彼が来秋の折、ある飲み屋で対面する機会に恵まれた。あの時のことを心から詫びたところ、彼は「いやいや、あの時のデットボールがあったからこそ今の俺があるんだ」と、こともなげに話していた。

物事をプラスに変えていく生き方と精神的な逞しさに、有藤通世と言う男の素晴らしさを知らされ感動した。

様々な思い出を持つ甲子園は忘れることの出来ない青春の一頁である。あれから半世紀余り、かつての甲子園球児も古希を迎え、前立腺最前線において認知症予備軍として日々暮らしている。

生きがいは、月並みですが孫と愛犬とのふれあい、そして野菜作りだ。野菜作りは百姓までいかず一姓位の腕前であるが、無農薬野菜なので家族やまわりの人々に喜ばれるので励みになっている。



今回、寄稿させていただきましたことで秋工時代の様々な思い出を甦ることが出来、若返ったようで感謝いたします。

東京秋工会の発展と会員皆様のご健康とご多幸をご祈念申し上げ寄稿とさせていただきます。